



モニタリングサイト1000 調査速報

干潟 Tidal Flats

はじめに

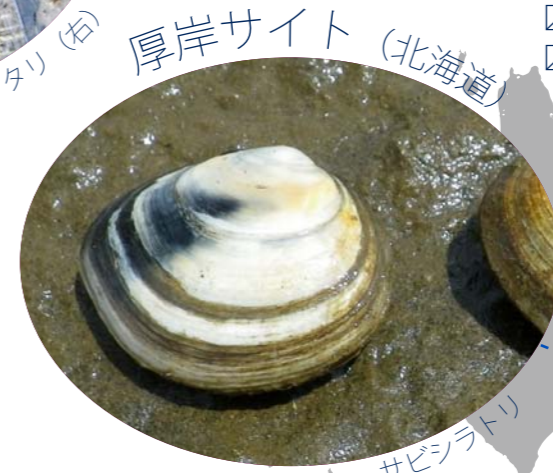
我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能（水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど）は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。

「干潟」とは？

砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される平な地形を示します。

干潟は潮の満ち引きがあるため、干出時には鳥類（シギ・チドリなど）のえさ場として、冠水時には稚仔魚の生育場として多くの生物に利用されます。また、陸水域から流入する有機物等を生物が利用するため、干潟には水質を浄化する作用などもあります。



- 速報掲載更新履歴
- New! 2016. 2.16 厚岸サイト [▶ Link](#)
 - New! 2016. 2.16 南紀田辺サイト [▶ Link](#)
 - New! 2016. 2.16 中津干潟サイト [▶ Link](#)
 - New! 2016. 2.16 石垣川平湾サイト [▶ Link](#)
 - 2015. 10.22 盤洲干潟サイト [▶ Link](#)
 - 2015. 8.24 松川浦サイト [▶ Link](#)
 - 2015. 8.24 汐川干潟サイト [▶ Link](#)
 - 2015. 8.24 永浦干潟サイト [▶ Link](#)

干潟調査

平成20年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の2つの調査により、各サイトの複数エリアで底生生物（貝類・カニ類・ゴカイの仲間）などの群集組成を調べることで干潟の長期変化をとらえ、生態系保全対策のための基礎情報を得ています。

平成27年度の調査では、日本沿岸の8箇所のサイトで7度目となる毎年調査を実施し、干潟表面や底土中に生息する生物の種類や数の変動を調べます。



参考情報

- 平成26年度モニタリングサイト1000 干潟調査速報 [▶ Link](#)
- 平成26年度モニタリングサイト1000 磯・干潟 調査報告書 [▶ Link](#)
- モニタリングサイト1000沿岸域調査磯・干潟・アマモ場・藻場2008-2012年度とりまとめ報告書 [▶ Link](#)



厚岸サイト

-北海道厚岸町-

- 北海道東部の別寒辺牛川流域の湿原から厚岸湖を通じて厚岸湾に至る水系内に形成された干潟です。
- 厚岸湾北湾奥の前浜干潟では、二枚貝のサビシラトリ等の北方に分布する種がみられ、厚岸湖の河口干潟では、アッケシソウやアッケシカワザンショウ等の塩性湿地で見られる生物が生息しています。

▼ 調査風景：干潟の砂泥中の生物を調べるため、砂泥を採集している様子。



▼ 潮下帯に優占して生育するアマモ。おそらく春に種子から発芽した実生と思われます。



2015年度 調査結果概要 Aエリア

定量調査では、オオノガイやミズヒキゴカイ科の一種が多く確認されました。また、定性調査では、アサリやアナジャコ類等が確認されました。干潟全体の景観の変化としては、防波堤の改築工事に伴い干潟全体の水深が深くなっていました。そのため、干潟となる部分の面積が減少した一方、干潟下部の潮下帯ではアマモ場の面積が拡大している様子がみられました。



▲ **Aエリア**：後背地では防波堤の改築工事が進行中で、潮上帯から潮下帯にかけての地形や生物相に影響が及ぶことが懸念されます。

2015年度 調査結果概要 Bエリア

定量調査では、昨年度同様に優占種であるホソウミニナやサビシラトリガイ等の貝類が確認されました。また、定性調査では、カワゴカイ類やハウザワイソギンチャク等も確認され、今年も希少種のアッケシカワザンショウがみられました。例年通り泥質の河口干潟が広がっている様子がみられ、周辺環境及び出現種ともに、ここ数年間に大きな変化はみられていません。



▲ **Bエリア**：潮間帯上部から植生帯にかけての調査地の様子。今年度の調査でも大きな環境変化は確認されませんでした。



▲ 植生帯付近で見られる希少植物のアッケシソウ（絶滅危惧II類）と希少な微小巻貝のアッケシカワザンショウ（準絶滅危惧）。



▲ 優占種のホソウミニナ
干潟表面にはホソウミニナが這い回った跡が確認できました。

□ 調査日 2015.7.14-15

□ サイト代表者：仲岡雅裕
(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

□ 調査者・調査協力者 (*写真撮影)

仲岡雅裕* (北海道大学)
頼末武史 (北海道大学)
桂川英徳 (北海道大学)

安孝珍 (北海道大学)
橋本真理奈 (北海道大学)
Venus Leopardas (北海道大学)

須藤健二 (北海道大学)
伊藤美菜子 (北海道大学)
山口遙香 (北海道大学)





松川浦 サイト

- 福島県南相馬市 -

モニタリングサイト1000
Since 2003

- 仙台湾の南端部に位置し、砂州によって太平洋と隔てられた南北に細長い潟湖内に形成された東北地方最大級の干潟です。
- 震災以前は 200 種ほどの底生動物が確認されており、種多様性が高い干潟でした。
- 仙台湾沿岸の干潟へ底生動物を供給する役割をもった干潟の一つです。



▲ **Aエリア**：潮間帯下部から潮下帯にかけてアマモがパッチ状に生育している様子が多くみられ、アマモ場は確実に回復してきているようです。



▲ **Bエリア**：磯部地区の護岸からみた調査エリアの様子。震災後、干出する面積が狭くなったうえ、泥でぬかるみ、アプローチが難しくなりました。

▼ アサリを捕捉して引きずるサキグロタマツメタ (外来種)



2015年度 調査結果概要 **Aエリア**

震災の影響により激減したホソウミニナの生息密度は増加し、エリア全域に分布を広げていました。干潟表面には、巻貝のマツカワウラカワザンショウやヤミヨキセワタが数多くみられ、外来種のサキグロタマツメタも確認されました。また、潮間帯下部では、希少種であるツバサゴカイの棲管が多数観察できました。

▼ 生息密度が増加したホソウミニナ



2015年度 調査結果概要 **Bエリア**

干潟表面にはヤミヨキセワタが多くみられたほか、ニッポンドロソコエビやホソウミニナも確認できました。震災後、ほとんど見つからなかったホソウミニナは、少しずつ個体数を回復してきているようでした。底土中にはヘテロマスチス属やムロミスナウミナナフシが多くみられ、イソシジミやアサリの大型個体が確認できました。



▲ 潮間帯上部で確認された大型のイソシジミ (黄印) とオキシジミ (緑印)



▲ 粘着質の砂泥底のため、全員が泥まみれとなって調査をしました。

□ 調査日 2015.6.18-19

□ サイト代表者：鈴木孝男 (東北大学)

□ 調査者・調査協力者 (* 写真撮影)

鈴木孝男* (東北大学)
柚原 剛 (東北大学)

金谷 弦 (国立環境研究所)
多留聖典 (東邦大学)

青木美鈴 (WIJ)
山下友実 (WIJ)





盤洲干潟サイト

モニタリングサイト1000
Since 2003

- 千葉県木更津市 -

- 東京湾東岸部の小櫃（おびつ）川河口部より広がる砂質干潟で、東京湾で最大級の面積を誇ります。また、「日本の重要湿地 500」に選ばれています。
- 外周を形成する前浜干潟では巻貝のイボキサゴなどがみられ、小櫃川右岸の三角洲の後背湿地では、ヨシや転石の間に巻貝やカニ類、滞筋（みおすじ）には多毛類が優占して見られます。



▲ **Aエリア**：潮間帯下部での調査の様子。必ずしも天候に恵まれるわけではなく、時々強い雨が降る中で調査をしました。



▲ **Bエリア**：小櫃川右岸の三角洲と後背湿地の様子。写真中央部の泥底部あたりが調査地点となります。

▼ ミサキギボシムシ（体の一部）。強力な臭いで存在がわかることが多い。



2015年度 調査結果概要 **Aエリア**

出現する生物は例年同様で、ツツオオフェリアやイボキサゴ等が優占していました。定性調査では、ミサキギボシムシ、東京湾では希少なフトヘナタリ等が、今年度も確認できました。昨年度に比べると潮間帯下部で出現した種数はやや少ない傾向でしたが、おそらく調査の時に降った強い雨が、発見効率と生物活動を低下させたことによる影響であると思われます。

▼フトヘナタリ（準絶滅危惧）。ヨシ原内部において局所的に数個体が確認できました。



2015年度 調査結果概要 **Bエリア**

定量調査では、Aエリアと比べて種数や個体数は少なかったが、定性調査ではAエリアに匹敵する種数を確認することができました。また、本調査開始から2012年度に初めて記録されたトリウミアカインソモドキを確認することができた一方、2013年度まで確認できたヒメアシハラガニは、昨年度同様に、確認できませんでした。



▲トリウミアカインソモドキ。
砂泥底にて複数の個体が確認できました。



▲ 定性調査でみつかったカハレカワザンショウ（絶滅危惧II類）。
殻高約1mmの微小巻貝で、棲息する潮位が限定されている可能性が高い。

□ 調査日 2015.6.3-5

□ サイト代表者：多留聖典（東邦大学）

□ 調査者・調査協力者（*写真撮影）

多留聖典*（東邦大学）
金谷 弦（国立環境研究所）

海上智央（自然教育研究センター）
青木美鈴（WIJ）

尾島智仁（日本水中科学協会）





汐川干潟サイト

モニタリングサイト1000
Since 2003

- 愛知県豊橋市・田原市 -

- 渥美半島と知多半島に挟まれた三河湾奥の東側に位置しています。
- 干潟表面にはウミニナ・ヘナタリなどの巻貝、底土中にはオキシジミ・ユウシオガイなどの二枚貝類、ミズヒキゴカイなどの多毛類が数多く生息しています。

▼ 調査風景：今年はアオサ類（海藻）の堆積が目立つ



▼ シャミセンガイ類 潮間帯下部で発見された



2015年度 調査結果概要 B エリア

干潟表面にはウミニナやヘナタリが高密度に分布していました。また、絶滅危惧Ⅱ類のイボウミニナやムギワラムシなどの希少種も少数ですが確認できました。

今年度の調査では、1970年代の記録を最後に汐川干潟では生息が確認されていないシャミセンガイ類の比較的新しい死殻が発見されました。



▲ Bエリア：潮間帯中部に見られるマガキの集団。マガキにはフジツボ類が付着し、タマキビ・カキウラクチキレモドキ・ウネナシトマヤガイなどの微小貝類が間隙にみられます。



▲ Cエリア：紙田川河口部。干潟表面にところどころ見られるくぼみは、エイの捕食痕と思われる。



▲ ウミニナ（緑印）とヘナタリ（黄印）

2015年度 調査結果概要 C エリア

干潟表面にはウミニナ・ホソウミニナ・ヘナタリが分布し（写真左）、底土中からは多毛類のミズヒキゴカイやオキシジミ（写真下）などの二枚貝類が確認できました。潮間帯上部の塩性湿地では、コメツキガニやチゴガニも確認できました。以前生育が確認された外来植物のヒガタアシは、今年度の調査では確認されませんでした。



▲ オキシジミ白色型 多くは紫色の殻のため白色は珍しい

□ 調査日 2015.5.20.

□ サイト代表者：木村妙子（三重大学）

□ 調査者・調査協力者（*写真撮影）

木村妙子*（三重大学）
木村昭一*（三重大学）

吉岡志帆（三重大学）
村山 稜（鈴鹿工業高専）

藤岡エリ子（汐川干潟を守る会）
藤岡純治（汐川干潟を守る会）



南紀田辺サイト

-和歌山県田辺市-

- 紀伊半島南西部の田辺湾に位置し、沿岸域は黒潮の影響を受けるため、多種多様な海洋生物が生息しています。
- イワガニ上科のカニ類や二枚貝・巻貝類の種数が多くみられ、レッドリストに掲載されている種が30種以上確認される貴重な干潟です。
- 南紀白浜から田辺湾は、「日本の重要湿地500」にも選定されています。

▼ ウモレベンケイガニ（潮間帯上部にて、本調査開始以来7年連続で確認）



2015年度 調査結果概要 Aエリア

定性調査では、今年も希少種のウモレベンケイガニが確認されました。また、巻貝類のクリイロカワザンショウとツブカワザンショウ、カニ類のオキナワヤワラガニが本調査開始以降初めて記録されました。第7回自然環境保全基礎調査の干潟調査（2004年）以来、ハゼ科のタビラクチ（写真右）の生息は確認されていませんでしたが、今年度調査にておよそ10年ぶりに生息を確認しました。

▼ タビラクチ（潮間帯下部にて、本調査では初めて記録された。第7回自然環境保全基礎調査以来となる。）



▲ Aエリア：潮上帯部から調査エリアを撮影。底質は軟泥の潟湖干潟です。



▲ Bエリア：潮間帯下部より上部に向かって撮影。底質は砂の前浜干潟です。



▲ シオヤガイ（両エリアでともによく見られる）

2015年度 調査結果概要 Bエリア

定量調査では、二枚貝類のシオヤガイ等が確認されました。また、昨年度に続きスジホシムシモドキヤドリガイ、宿主のスジホシムシモドキも確認されました。定性調査では、二枚貝類のタガソデモドキ、ホソヒゲナガラジムシ、オキナワヤワラガニ等が、本調査開始以降初めて記録されました。また、コブシアナジャコも確認されました。



▲ コブシアナジャコ（潮間帯下部にて確認）

□ 調査日 2015.6.18-19

□ サイト代表者：古賀庸憲(和歌山大学)

□ 調査者・調査協力者（*写真撮影）

古賀庸憲*（和歌山大学）
香田唯（兵庫県在住）

渡部哲也*（西宮市貝類館）
大古場正（大阪市立自然史博物館友の会）
石原（安田）千晶（和歌山大学）





中津干潟サイト

-大分県中津市-

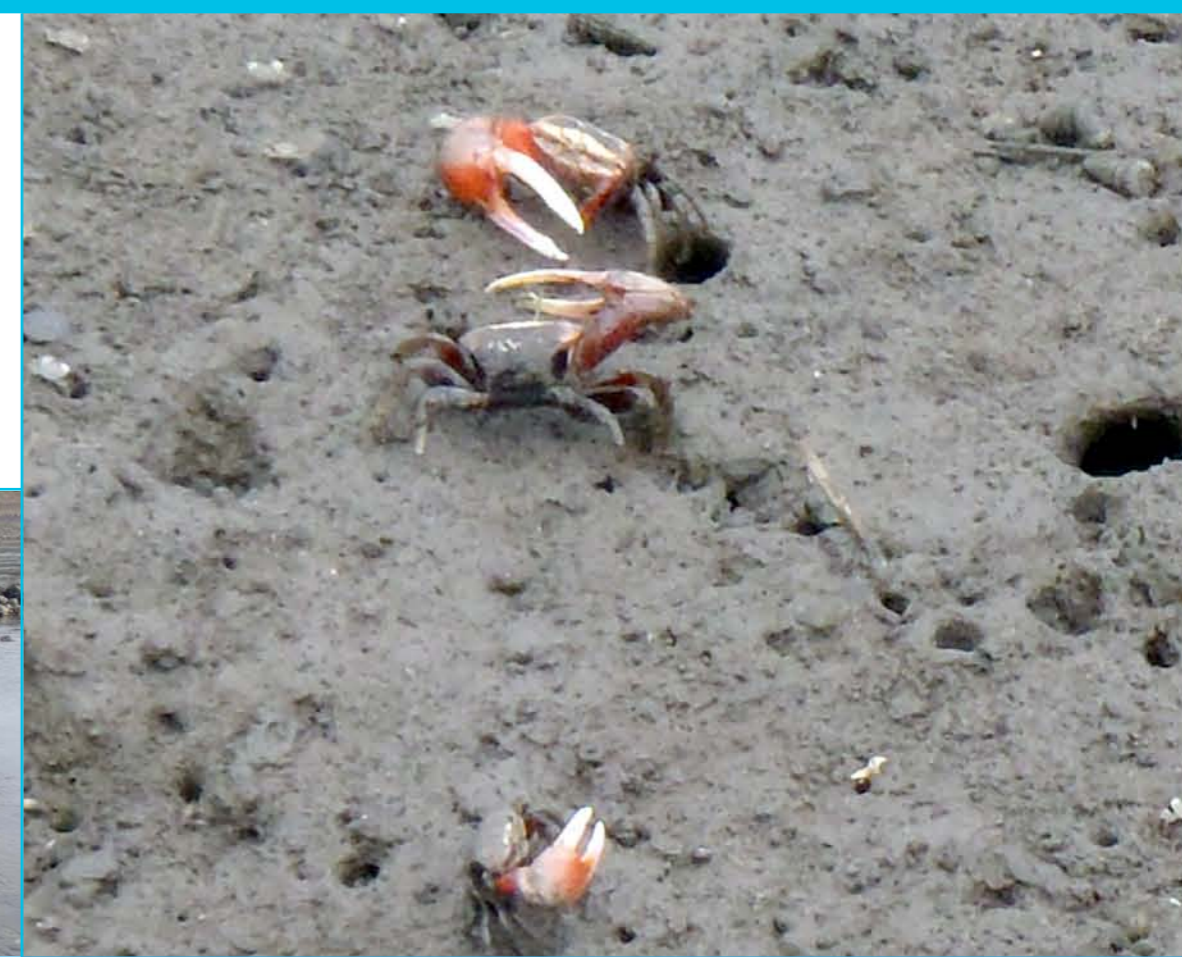
- 瀬戸内海の南西端に位置する海域の周防灘に面した干潟です。
- 瀬戸内海では最大面積を誇る自然干潟であり、その環境は一様ではなく、調査エリアを3エリア設けています。また、絶滅危惧種のカブトガニが生息している数少ない干潟のひとつです。
- 主に砂質干潟であるが、塩性湿地や転石帯、コアマモ等の植生帯もあり、実に多様な底生動物（ベントス）が生息しています。

2015年度 調査結果概要 **A**エリア

定性調査では、希少種である巻貝類のカワアイやシマヘナタリが、カニ類ではシオマネキが確認されました。また、カブトガニやシカメガキも確認され、その生息数が増えているようでした。定量調査では、オキシジミ等の二枚貝類のほか、コケゴカイ等の多毛類も確認できました。今年度は集中豪雨による河川氾濫等の影響もなく、生物相に大きな変化は確認されませんでした。



▲ 調査風景



▲ シオマネキ (環境省 RDB: 絶滅危惧II類)

▲ **A**エリア: 中津川河口 (河口干潟)

▼ **B**エリア: 東浜 (前浜干潟)

2015年度 調査結果概要 **B**エリア

定量調査では、アサリやマテガイ等の貝類やヒガタチロリ等の多毛類が確認されました。また、潮間帯下部では、小型のイシガレイが記録されました。本エリアで2010と2012年度調査において多産していた微小巻貝のオオシンデンカワザンショウは、2013年度調査以降、確認できていません。一方、年々コアマモの面積が拡大しており、干潟の生物相への影響が懸念されます。

▼ イシガレイ (篩の目合いは2mm。潮間帯下部にて確認された。)



▲ **C**エリア: 大新田 (前浜干潟)



▲ 潮間帯下部から潮下帯に広がるコアマモ

2015年度 調査結果概要 **C**エリア

Bエリア同様に、潮間帯下部から潮下帯に広がるコアマモの生育面積が顕著に拡大していました。定量調査では、ホソヒラムシやムギワラムシ等が確認されました。また、定性調査では、シカメガキやクロヒメガキ等のカキ類、イボウミニナやカワアイ等の希少な巻貝類が確認できました。本エリアの生物相には大きな変化はみられませんでした。

□ 調査日 2015.6.2-4

□ サイト代表者: 浜口昌巳 (水産総合研究センター)

□ 調査者・調査協力者 (*写真撮影)

浜口昌巳 (水産総合研究センター) 梶原直人* (水産総合研究センター)

西 栄二郎 (横浜国立大学)



- 有明海と八代海を結ぶ瀬戸に位置する永浦島南部の干潟で、周囲は雲仙天草国立公園に指定されています。
- 底生動物の種多様性は高く、マキガイイソギンチャク、ウミニナ、テナガツノヤドカリ、ツバサゴカイなどが生息しています。



2015年度 調査結果概要 Aエリア

出現する優占種（ホソウミニナ、ウミニナ、ハクセンシオマネキなど）に目立った変化はみられませんでした。昨年度の調査同様に低潮帯ではテングニシが数多く確認されました。また、ここ数年の調査において、全国的には希少種であるイボウミニナ（写真右）が、比較的よく確認でき、数が増加しているように感じられます。



▲ Aエリア：潮上帯は護岸されており、潮間帯上部は砂泥質、下部は泥質のエリア。ハクセンシオマネキの群生地としても知られます。



▲ Bエリア：潮上帯は自然海岸であり、全体的に砂泥質のエリア。転石や岩礁も見られ、潮間帯下部にはアマモ場がみられます。



▲ ミドリシャミセンガイ

2015年度 調査結果概要 Bエリア

出現する優占種（アラムシロ、ホトトギスガイ、ホシムシの一種など）に目立った変化はみられませんでした。本エリアでは、数年前からミドリシャミセンガイ（写真左）が確認されるようになっていましたが、今年度は顕著に個体数が増えているようでした。



▲ マテガイ 地元の人が食用に採集していた

□ 調査日 2015.4.18-19

□ サイト代表者：逸見泰久（熊本大学）

□ 調査者・調査協力者（*写真撮影）

逸見泰久*（熊本大学）
田中源吾（熊本大学）

岡本浩太郎（熊本大学）
林悠真（熊本大学）

笠原悠生（熊本大学）
佐久川尚人（熊本大学）

逸見高志（熊本市）



石垣川平湾サイト

-沖縄県石垣市-

- 石垣島西北岸にある内陸に入り込んだ湾に位置する干潟です。
- 琉球列島固有種のリュウキュウコメツキガニとミナミコメツキガニがみられ、二枚貝のウメノハナガイもよく確認されます。
- 川平湾とその後背の於茂登岳一帯は、その美しい景観と地域固有の文化史的価値から、国の名勝に指定されています。



▲ **Aエリア** :川平湾の湾口部近くに位置しており、小川の流入が見られます。また、後背地にはマングローブが広がっています。



▲ **Bエリア** :川平湾の湾奥部に位置しています。干潟表面にはリュウキュウコメツキガニやミナミコメツキガニが作った砂団子が観察できます。

▼ 調査風景：底質を篩う様子



2015年度 調査結果概要 Aエリア

定性調査にてタテジマユムシやリスガイ等が確認できました。定量調査では優占種等に目立った変化はみられませんでした。本調査開始以降初めて、甲殻類ではアマミマメコブシガニとブビエスナモグリが確認できました。干潟の底質は例年よりも固く、一部では岩盤の露出もみられました。おそらく台風の影響等により干潟表面の砂が流出したと思われる。

▼ リスガイ 潮間帯上部で確認された。



2015年度 調査結果概要 Bエリア

潮間帯下部の定性調査にて、本調査開始以降初めて、テンセイタマガイやベッコウマメアゲマキ等の希少種を確認することができました。また、流木中にフナクイムシ科の一種を確認しました。定量調査においては、リュウキュウコメツキガニやミナミコメツキガニ等の琉球列島固有種や二枚貝のウメノハナガイが優占し、例年と比較して目立った変化は確認されませんでした。



▲ テンセイタマガイ 潮間帯下部で確認された。
(環境省 RDB：準絶滅危惧、沖縄県 RDB：絶滅危惧Ⅱ類)



▲ ベッコウマメアゲマキ 潮間帯下部の転石帯で確認された。
(環境省 RDB：準絶滅危惧)

□ 調査日 2015.8.1-2
□ サイト代表者：岸本和雄 (沖縄県水産課)

□ 調査者・調査協力者 (*写真撮影)

岸本和雄* (沖縄県水産課)
狩俣洋文* (沖縄県水産課)

久保弘文 (沖縄県水産海洋研究センター)
藤田喜久 (沖縄県立芸術大学)
村山雅庸 (沖縄県石垣市在住)

